

教科書における「伊豆の踊子」削除・編集箇所概略表

西尾 泰貴

本資料は川端康成「伊豆の踊子」が教科書に採録される際、どのような箇所が削除・編集される傾向にあるのかを示す概略表である。

教科書における「伊豆の踊子」研究として、森本穫「文学教材としての「伊豆の踊子」」（『川端康成研究叢書1』傷魂の青春』一九七八年八月、教育出版センター）や長谷川明久「少女の言葉「伊豆の踊子」と「富嶽百景」」（『月刊国語教育』一九九六年七月）、藤本英二「『伊豆の踊子』から教科書を考える」（『高校のひろば』一九九六年六月）が挙げられるが、いずれも具体的にどの箇所が削除・編集されやすいのかに関して調査や検討は行われていない。以上の研究状況に鑑みると、教科書というメディアにおいて、どのように「伊豆の踊子」が受容されてきたのかを歴史的に明らかにする必要があるのではないだろうか。

対象となる教科書は阿武泉『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品13000』（二〇〇八年、日外アソシエーツ株式会社）を参照しつつ、「伊豆の踊子」が採録された四二冊（教科書会社数一五社）とし、それら教科書全てを調査し、表を作成した。なお、本資料は主要な高等学校国語教科書を対象としており、副読本等は含んでいない。

本資料は「教科書会社名」、「教科書名」、「刊行年」、「採録された章」、「削除・編集の有無①～⑧」から成っている。「削除・編集されやすい箇所」の①～⑧は以下の通りである。なお、本文引用は全て「伊豆の踊子」（『川端康成全集第二巻』一九八〇年一〇月、新潮社）に依った。

①「中風」の「爺さん」に関する箇所

「一」

その部屋は爐が切つてあつて、障子を明けると強い火氣が流れて來た。私は敷居際に立つて躊躇した。水死人のやうに全身蒼ぶくれの爺さんが爐端にあぐらをかいてゐるのだ。瞳まで黄色く腐つたような眼を物憂げに私の方へ向けた。身の周りに古手紙や紙袋の山を築いて、その紙屑のなかに埋もれてゐると言つてもよかつた。到底生物と思へない山の怪奇を眺めたまま、私は棒立ちになつてゐた。

「こんなお恥かしい姿をお見せいたしました……。でも、うちのぢぢいでございますから御心配なさいますな。お見苦しくても、動けないのでございますから、この

ままで堪忍してやつて下さいまし。」

さう斷わつてから、婆さんが話したところによると、爺さんは長年中風を患つて、全身が不随になつてしまつてゐるのださうだ。紙の山は、諸國から中風の養生を教へて來た手紙や、諸國から取り寄せた中風の藥の袋なのである。爺さんは峠を越える旅人から聞いたり、新聞の廣告を見たりすると、その一つも洩らさずに、全國から中風の療法を聞き、賣藥を求めたのださうだ。そして、それらの手紙や紙袋を一つも捨てずに身の周りに置いて眺めながら暮らして來たのださうだ。長年の間にそれが古ぼけた反古の山を築いたのださうだ。

「一」

「お爺さん、お大事になさいよ。寒くなりますからね。」と私は心から言つて立ち上がった。爺さんは黄色い眼を重そうに動かして微かにうなづいた。

「旦那さま、旦那さま。」と叫びながら婆さんが追つかけて來た。

「こんなに戴いては勿體なうございます。申譯ございません。」

そして私のカバンを抱きかかえて渡さうとせずに、幾ら斷わつてもその邊まで送ると言つて承知しなかった。一町ばかりもちよこちよこついて來て、同じことを繰り返してゐた。

「勿體なうございます。お粗末いたしました。お顔をよく覚えて居ります。今度お通りの時にお禮をいたします。この次もきつとお立ち寄り下さいまし。お忘れはいたしません。」

私は五十錢銀貨を一枚置いただけだつたので、痛く驚いて涙がこぼれさうに感じてゐるのだったが、踊子に早く追ひつきたいものだから、婆さんのよろよろした足取りが迷惑でもあった。たうとう峠のトンネルまで來てしまった。

「どうも有難う。お爺さんが一人だから歸つて上げて下さい。」と私が言ふと、婆さんはやつとのことでカバンを離した。

②旅芸人への差別的表現

「一」

「あんな者、どこで泊るやら分るものでございますか、旦那様。お客があればあり次第、どこにだつて泊るんでございますよ。今夜の宿のあてなんぞございますものか。」

「四」

純朴で親切らしい宿のおかみさんが、あんな者に御飯を出すのは勿體ないと言つて、

私に忠告した。

「五」

「さあお先きにお飲みなさいまし。手を入れると濁るし、女の後には汚いだらうと思つて。」とおふくろが言った。

「五」

途中、ところどころの村の入口に立札があつた。

——物乞ひ旅藝人村に入るべからず。

③踊子を今夜泊ませたいという「私」の空想に関わる箇所

「一」

甚だしい輕蔑を含んだ婆さんの言葉が、それならば、踊子を今夜は私の部屋に泊らせるのだ、と思つた程私を煽り立てた。

「二」

この意外な言葉で、私はふと自分を省みた。峠の婆さんに煽り立てられた空想がぼきんと折れるのを感じた。

④大島に関する「私」と旅藝人との会話

「二」

大島のことをいろいろ訊ねた。

「學生が澤山泳ぎに来るね。」と、踊子が連れの女に言つた。

「夏でせう。」と、私が振り向くと、踊子はどぎまぎして、

「冬でも……。」と、小聲で答へたやうに思はれた。

「冬でも？」

踊子はやはり連れの女を見て笑つた。

「冬でも泳げるんですか。」と、私がもう一度言ふと、踊子は赤くなつて、非常に眞面目な顔をしながら輕くうなづいた。

「馬鹿だ。この子は。」と、四十女が笑つた。

⑤湯に入ってきた男の身の上話を聞く箇所

「二」

そこの内湯につかつてゐると、後から男がはいつて來た。自分が二十四になるこ

とや、女房が二度も流産と早産とで子供を死なせたことなどを話した。彼は長岡温泉の印半纏を着てゐたので、長岡の人間だと私は思つてゐたのだつた。また顔附も話振りも相當知識的なところから、物好きか藝人の娘に惚れたかで、荷物を持つてやりながらついて來てゐるのだと想像してゐた。

⑥踊子の今夜が汚れることを懊悩する箇所

「二」

やがて、皆が追つかけつこをしてゐるのか、踊り廻つてゐるのか、亂れた足音が暫く續いた。そして、びたと靜まり返つてしまつた。私は眼を光らせた。この靜けさが何であるかを闇を通して見ようとした。踊子の今夜が汚れるのであらうかと悩ましかつた。

雨戸を閉ぢて床にはいつも胸が苦しかつた。また湯にはいつた。湯を荒々しく掻き廻した。雨が上つて、月が出た。雨に洗はれた秋の夜が冴え冴えと明るんだ。跣で湯殿を抜け出して行つたつて、どうとも出来ないのだと思つた。二時を過ぎてゐた。

⑦旅芸人の死んだ赤ん坊に関する箇所

「四」

「さうなさいましよ。折角お連れになつていただいて、こんな我儘を申しちやすみませんけれど——。明日は槍が降つても立ちます。明後日が旅で死んだ赤坊の四十九日でございましてね、四十九日には心ばかりのことを、下田でしてやりたいと前々から思つて、その日までに下田へ行けるやうに旅を急いだったのでございますよ。そんなこと申しちや失禮ですけれど、不思議な御縁ですもの、明後日はちよつと拝んでやつて下さいましな。」

「四」

「さうでしたか。あの上の娘が女房ですよ、あなたより一つ下、十九でしてね、旅の空で二度目の子供を早産しちまつて、子供は一週間ほどして息が絶えるし、女房はまだ體がしつかりしないんです。あの婆さんは女房の實のおふくろなんです。踊子は私の實の妹ですが。」

「四」

一時間程すると四人一緒に歸つて來た。

「これだけ……。」と、踊子は握り拳からおふくろの掌へ五十錢銀貨をざらざら落

した。私はまた暫く「水戸黄門漫遊記」を口讀した。彼らはまた旅で死んだ子供の話をした。水のやうに透き通つた赤坊が生れたのださうである。泣く力もなかつたが、それでも一週間息があつたさうである。

「五」

「東京のどこに家があります。」

「いいや、學校の寄宿舎にゐるんです。」

「私も東京は知つてます、お花見時分に踊りに行つて——。小さい時でなんにも覚えてゐません。」

それからまた踊子は、

「お父さんありますか。」とか、

「甲府へ行ったことがありますか。」とか、ぼつりぼつりいろんなことを聞いた。下田へ着けば活動を見ることや、死んだ赤坊のことなどを話した。

⑧踊子の寝姿が「私」の胸を染める箇所

「四」

私の足もとの寢床で、踊子が眞赤になりながら兩の掌ではたと顔を抑へてしまつた。彼女は中の娘と一つの床に寝てゐた。昨夜の濃い化粧が残つていた。唇と眦の紅が少しにじんてゐた。この情緒的な寝姿が私の胸を染めた。彼女は眩しさにくると寢返りして、掌で顔で隠したまま蒲團を迂り出ると、廊下に坐り、

「昨晚はありがとうございました。」と、綺麗なお辭儀をして、立つたまゝの私をまごつかせた。

男は上の娘と同じ床に寢ていた。それを見るまで私は、二人が夫婦であることをちつとも知らなかつたのだつた。

以上が本資料で扱っている削除・編集箇所である。ただし、教科書における「伊豆の踊子」の削除・編集箇所は教科書会社によってより細かい差異があり、本資料内で扱いきれなかった箇所もある。

例えば、光村図書の『現代国語 一』（一九七三年）では、「六」の初めから「百合子」が「硬くなつてうつむいてしま」う場面までを削除した上で、「下田に着いた。「私」は、明日の朝の船で東京に帰らなければならなかった。旅費がもうなくなっているのだ。明日があかんぼうの四十九日だからせめてもう一日、と言われたが、「私」は、學校の都合があると言って断つた。」という一文を教科書会社が作成し、挿入している。

また、実教出版の『現代国語 一 改訂版』（一九六七年）、『現代国語 一 三訂版』（一九七〇年）、『現代国語 一』（一九七三年）、『現代国語 一 改訂版』（一九七六年）では、「二」の四十女の「まあ！厭らしい。」という台詞から「四」の終わりまでを削除した上で、「一時間ほど休んでから、私は別の温泉宿へ移った。その晩は、ひどい雨になった。雨の激しい音の遠くに太鼓の響きが生まれ、踊り子や芸人たちの声らしいものが聞こえた。私は一行に誘われて、下田へたつときも同行することになった。」という一文を作成し、挿入している。

こういった削除箇所を補填するような文章を挿入することは他の教科書でも見られる。しかし、こういった編集は各教科書によって多岐にわたる。本資料では紙幅の都合上、また一定の簡潔さを目指しつつ、おおまかな削除・編集の傾向を示すため、前述したような細かい編集箇所は挙げていない。そのため、本資料を「概略表」と称した。前述した細かい削除・編集箇所や、教科書における「伊豆の踊子」受容の歴史については、別稿にて扱っていきたい。

教科書会社名	教 科 書 名	刊行年	採録された章	削除・編集の有無①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
好学社	高等学校国語 一 上 (新版)	1956	一、二、五	×	×	×	×	○	○	×	×
好学社	新編 高等学校国語 一	1959	一、二、五	×	×	×	×	○	○	×	×
好学社	高等学校現代国語 一	1963	一、二、五	×	×	×	×	○	○	×	×
好学社	高等学校現代国語 一	1968	一、二、五	×	×	×	×	○	○	×	×
好学社	高等学校現代国語 一 改訂版	1971	一、二、五	×	×	×	×	○	○	×	×
角川書店	高等学校国語 一 総合	1958	一、二、五	×	×	×	×	○	○	×	×
角川書店	高等学校現代国語 一	1963	一、二、五	×	×	×	×	○	○	×	×
角川書店	高等学校現代国語 一 改訂版	1967	一、二、五	×	×	×	×	○	○	×	×
中央図書	高等学校現代国語 1	1963	一、二、五	×	×	○	×	○	×	×	×
中央図書	高等学校現代国語 1 改訂版	1968	一、二、五	×	×	○	×	○	×	×	×
中央図書	高等学校現代国語 1 三訂版	1971	一、二、五	×	×	○	×	○	×	×	×
秀英出版	国語現代編 二	1964	一、二、四	○	×	○	○	○	○	○	○
秀英出版	現代国語 二 改訂版	1967	一、二、四	○	×	○	○	○	○	○	○
実教出版	現代国語 一 改訂版	1967	一、二、五、六、七	×	○	×	×	×	×	×	×
実教出版	現代国語 一 三訂版	1970	一、二、五、六、七	×	○	×	×	×	×	×	×
実教出版	現代国語 一	1973	一、二、五、六、七	×	○	×	×	×	×	×	×
実教出版	現代国語 一 改訂版	1976	一、二、五、六、七	×	○	×	×	×	×	×	×
大原出版	高等学校現代国語 二	1964	一、二、五、六、七	×	○	×	×	×	×	×	×
大修館書店	新高等国語 新訂版 1	1960	一、二、三、五、六、七	×	×	○	○	○	×	×	×
大修館書店	高等学校国語 1	1982	一、二、三、五、六、七	×	×	○	○	○	×	×	×
大修館書店	高等学校国語 1 改訂版	1985	一、二、三、五、六、七	×	×	○	○	○	×	×	×
大修館書店	高等学校国語 1 三訂版	1988	一、二、三、五、六、七	×	×	○	○	○	×	×	×
大修館書店	高等学校国語 1 四訂版	1991	一、二、三、五、六、七	×	×	○	○	○	×	×	×
大修館書店	高等学校国語 1	1994	一、二、三、五、六、七	×	×	○	○	○	×	×	×
大修館書店	高等学校国語 1 改訂版	1998	一、二、三、五、六、七	×	×	○	○	○	×	×	×
大修館書店	国語総合	2003	一、二、三、五、六、七	×	×	○	○	○	×	×	×
大日本図書	新版 現代国語 一	1967	一前半、二前半、五、六、七	×	○	×	○	×	×	×	×
大日本図書	新訂版現代国語 一	1970	一前半、二前半、五、六、七	×	○	×	○	×	×	×	×
教育出版	標準高等国語総合編 1	1957	五、六、七	×	×	×	×	×	×	×	×
教育出版	現代国語 一	1973	全章	×	○	○	×	×	×	×	○
教育出版	新訂 現代国語 一	1976	全章	×	○	○	×	×	×	×	○

教科書会社名	教科書名	刊行年	採録された章	削除・編集の有無①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
教育出版	最新現代国語 1	1979	全章	×	○	○	×	×	×	×	○
尚学図書	高等学校新選現代国語 一	1967	全章	○	○	○	○	○	×	×	×
尚学図書	高等学校新選現代国語 一	1970	全章	○	○	○	○	○	×	×	×
光村図書	現代国語 一	1973	全章	○	○	○	○	×	×	×	○
第一学習社	高等学校現代国語 一	1973	全章	○	○	○	○	○	×	×	×
東京書籍	現代国語 一	1973	全章	×	×	○	○	○	×	×	×
東京書籍	新訂 現代国語 一	1976	全章	×	×	○	○	○	×	×	×
東京書籍	改訂 現代国語 一	1979	全章	×	×	○	○	○	×	×	×
明治書院	新編 現代文	1987	全章	×	×	○	○	○	×	×	×
明治書院	新編 現代文 改訂版	1990	全章	×	×	○	○	○	×	×	×
三省堂	新編 現代文	2000	全章	○	○	○	○	○	○	○	○

(にしお・たいき／早稲田大学大学院)